

のとなつたかもしれない。ただし *lyrisme* にせよ *rythme* にせよ、原文はこの仏訳がしているほど鮮明ではないし、また他の箇所でもいろいろ考えられるので、これも一つの研究課題である。

以上思いつづまま雑多なことを記したが、初めに述べたように新訳から受ける『告白』の印象は実に強烈であり、また学問的にも大きな刺激を与えられる。古典の翻訳ほど労多きものは他にないが、その報いは決して少くはない。このようなすぐれた訳がどれほど多くの人の精神を富まし、学問的なレベルを上げるのに役立つかは、計り知りえないほどである。

清水正照著・アウグスティーヌス

形而上学研究

——アウグスティーヌスにおけるパウロ書翰と新プラトン主義——

387頁 東京・錦正社 1968

加藤 武

I 方法論

著者のアウグスティーヌス研究は、九州大学および佐賀大学における長い年月の着実な厳しい歩みの結晶であり、特に、若きアウグスティーヌスの著作群への精細な省察としては、日本における最初の輝かしい光に満ちたモニュメントとして貴重な業績である。ヨーロッパにおいて、十九世紀の末葉、ハルナック、ポアシェ等によって始められた、「告白録」をカッシキアクム著作群と対比しながら、その真正性を批判的に検討し、とりわけて「新プラトン主義者であったか、カトリシャンであったか？」の観点に立ちつつ心理的（実存的）・実証主義的な態度を以て逼る方法は、著者が特にとりあげて丹念な対決を試みておられるティムメ、ネルレガードの秀れた研究を経て、第二次大戦後はフランスのクルセル、アンリに率いられる方法において従来より一層文献学的方法を以て、ほぼ一応の結

論に達したと思われる。すなわち、当初の否定的な設問に対しては、むしろ温健な肯定をもって、新プラトンのためでありつつ、あくまで真正なカトリシアンとみる（ソリニャックなど）。

著者は上の如き研究の方向に対して、設問それ自体が最初から一面的ないし誤っていたとし、また、余りにも実証主義的な研究態度が、実はアウグスティヌスの若き日の思索にすでにひそむ「形而上学」を見逃す傾向のあることを批評している。もとより全体的な傾向として、文献学的方法が圧倒的な優越性を示していることは、ヨーロッパの学界の今日なお変らぬ特徴であり、それは、伝統的なドグマからの自由への要請と密接に結びついており、原文への心ゆくまでの緻密な分析の態度は高く評価すべきものとする。しかし、その反面に清水氏の指摘されるような側面がつきまとっていることも事実である。なるほど、ベルリナーを始めとする実存論的研究、シントラー等に見られる解釈学的研究が、新しい哲学的なアプローチとして胎動しつつあるとはいえ、なお未熟であり、フランスを中心とする文献学的方法をくぐらぬ以上、真に実り豊かな成果をなお期し難い。

II 新プラトンのか……

著者は、新プラトンのかキリスト教的かのハルナック以来の設問について、次のように言っている。

「私は、ヨーロッパにおける神学の研究者は実際の宗派のドグマに関心を有し、この関心が先行することによって、アウグスティヌスの哲学の前提ともいべき歴史的・客観的条件の理解の為に自己の主観的評価を抑止することが困難のように思われる。」(295頁)

また、

「近代の我々はプラトン哲学とキリスト教の極限化された姿が対立的に強調された時代を経過している。もしアウグスティヌスがこの二つを相互補足的に極めて意味ある世界観乃至は思想として把握しているとするれば、彼の回心を二者選一的に評価するということは彼の思想の内的理解にとってどれ程の鍵となるというのであろうか。」(296頁)

如上の把握は、この時代の宗教史的背景としては、異存がない。また、余りに近代主義的な設問の不生産性についても同感である。しかし、その反面に

«ibi legi,…… non ibi legi. Item legi ibi,…… non ibi legi.» (Conf. VII, IX, 13—14)

という底の、独特の比較（水平的平面上の比較でなく、いわば垂直的比較ともいうべきか）による吟味がなされていることを、どう考えたらよいのだろうか。

III 解釈者アウグスティヌス

著者の考察は、再論の順序にでなく、オールマン、ヘーリンゲンにならって実際会話をもたれた順序に従って、逐次、論を進めている。

«videtur tibi non invento vero beate posse vivi, si tantum quaeratur?» (C. A. I., n. 6)

«etiam non inventa veritate» (C. A. I., n. 5)

このアンダーラインの部分はケクローの「ホルテンシウス」に見当たらない。(リュシュの復元参看。なお最近チサルビーノの研究が出た。) この部分はアウグスティヌスの附加文であるが、単なる附加文でないと著者が指摘されることは、まことに適切である。

「こうして、真理の探求という時、そこにはこのような一種の二重性の領域、いわば中間の領域が伏在している。これの解決に触れぬ限りスケプシスの主張もまたリケンティウスの弁解も空しい。」(35頁)

ここには著者も指摘する道の形而上学がある。最近ドイツの解釈学的なアプローチが種々試みられているが、それはなおディルタイ、ハイデッガーの域を出ぬものが多く、解釈者アウグスティヌスの、言語のたぐみな使用による思索に密着した研究が見当らぬ空しさも、この際指摘したい。しかし折角すぐれた着目を行いつつも、著者の「形而上学的」な掘り下げが、まさに深められるべきこのような箇所、意外に、歴史家的分析によって控えられているのは、いかがなものであろうか。

IV 言葉の巧みな使用による思索

「……我々（は？）ティンメとは全く逆に、アウグスティヌスはその思想的基盤において既に新プラトン主義的立場に立脚しその上でストア的術語を彼独自の用法の中に消化しようとしているのであるとこういってよいであろう。」（69頁）

「私はアウグスティヌスのかの解決が示しているものは単なる一つの *Stimmung* といったものではないと考える。それはむしろ人格の核における全き転換である。その急速な変化に追いついて行く言葉は様々な *doctrinae* としてむしろ動揺しつつ徐々に定着する。…… *«Videtisne aliud esse multas variasque doctrinas, aliud amimum attentissimum in Deum?»* (De b. v., c. iv, n. 27) と彼はいつている。つまり彼はこの神への志向、かかわりこそ自己の思想の中心としていたのであり、そして新プラトン主義的術語にしるストア的術語にしる自由に使うことができたのである。このような領域が開かれることが、同時に、照明でありまた探求の立場なのである。」（69頁）

このような現象学的分析は、いかにも秀れたものとして興味尽くし得ざるものと言わなければならない。しかし同時に、単に言葉が術語であり、「自由に」使われるのみであろうか、について疑念も存する。彼において言葉は単に衣装ではなく、思想の身体であるのだから。この意味ではモルマン学派の文体論研究は、将来思想史の研究にとっても省みられる余地がある。

以上、僅かの点についてだけ、遠慮のない所感を述べさせて頂いた。この8章400頁に及ぶ雄渾な大著を、緻密に精査しつつ、書評をとほ、久しき、喜ばしい希望であったが、学問への沈潜の時を奪われつつある状況のために、充分な書評ができぬことを、心から著者にお許しを乞い、他日の討論を期したい。（特に終章のパウロ理解に関する項については、重要な暗示に富む。）